

笑い茸わらだけ

野村胡堂

一

伽羅大尽磯屋貫兵衛の涼み船は、隅田川を漕ぎ上って、白鬚の少し上、川幅の広いところを選んで、中流に碇をおろしました。わざと気取った小型の屋形船の中は、念入りに酒が廻って、この時もうハチ切れそうな騒ぎです。

「さア、皆んな見てくれ、こいつは七平の一世一代だ——おりん姐さん、鳴物を頼むぜ」

笑い上戸の七平は、尻を端折ると、手拭をすっと冠りに四十男の恥も外聞もなく踊り狂うのでした。

取巻の清五郎は、芸者のお袖を相手に、引つきりなしに拳を打っておりました。貫兵衛の義弟で一番若い菊次郎はそれを面白ような苦々しいような、形容のしようのない顔をして眺めております。

伽羅大尽の貫兵衛は、薄菊石の醜い顔を歪めて、腹の底から一座の空気を享樂している様子でした。三十五という脂の乗り切った男盛りを、親譲りの金があり過ぎて、呉服太物問屋の商売にも身が入らず、取巻末社を引きつれて、江戸中の盛り場を、この十年間飽きもせずに押し廻って居る典型的なお大尽です。

「卯八、あの酒を持って来い」

大尽の貫兵衛が手を挙げる、

「へエ——」

爺やの卯八——その夜のお爛番——は、その頃は飛切り珍しかつ

たギヤーマンの徳利とっくりを捧げて、臚ともから現われました。

「さて皆の衆、聴いてくれ」

貫兵衛は徳利を爺やから受取って、物々しく見栄みえを切ります。
「やんややんや、お大尽のお言葉だ。皆んな静かにせい」

清五郎は真っ赤な顔を挙げて、七平の踊りとおりんの三味線を止めさせました。

「この中には、和蘭渡おらんだわたりの赤酒せきしゅがある。ほんの少しばかりだが、その味の良さというものは、本当にこれこそ天の美禄というものだろう。ほんの一杯ずつだが、皆んなにわけて進ぜたい。さア、年頭としがしらの七平から」

貫兵衛はそう言いながら、同じギヤーマンの腰高盃こしだかさかずきを取って、取巻の七平に差すのでした。

「有難いッ、伽羅大尽きやらの果報にあやかっただけでそれでは頂戴仕るとしましうか、——おっと散ります、散ります」

野幫間のだいこを家業のようにしている巴屋七平ともえやは、血のような赤酒を注がせて、少し光沢つやのよくなった額ひたいを、ピタピタと叩くのです。

「次は清五郎」

これは主人と同年輩の三十五六ですが、雑俳ざっばいも、小唄も、嘘八おと百も、仕方しかた嘸なし、音曲もいける天才的な道楽指南番で、七平に劣らず伽羅大尽に喰い下がっております。

「ヘエ——オランダ渡りの葡萄酒ぶどうの酒。話には聞いたが、呑むのは初めて——それでは頂戴いたします、ヘエ——」

美しいお蔭つたにお酌しゃくをさせて、ビードロの盃になみなみと注いだ赤酒くちびる。唇まで持って行って、フト下へ置きました。

「何うした、清五郎」

少し不機嫌な声で、貫兵衛はとがめます。

「いえ、少し気になることが御座います」

「何んだ」

「あれを——気が付きませんか、橋場のあたりでしょう。闇の中に尾を引いて、人魄が飛びましたよ」

「あれッ」

女三人は思わず悲鳴をあげました。

「おどかしてはいけない、多分四つ手駕籠の提灯か何んかだろう」と貫兵衛。

「そんな事かもわかりません、——ああ結構なお酒でございました、——もう一杯頂戴いたしましょうか」

清五郎は綺麗に呑み干した盃を、お蔦の前に突き付けるのです。「それはいけない、酒にも人数にも限りがある。その次は菊次郎だ」

「そう仰しやらずにもう一杯、——頬つぺたが落ちそうですよ」

「いや、重ねてはいけない、それ」

貫兵衛が目配せすると、お蔦は清五郎の手から盃をさらって、菊次郎のところへ持って行きました。貫兵衛の義理の弟で三十前後、これは苦み走ったなかなか良い男です。

菊次郎もどうやら一杯呑みました。義兄が秘蔵の赤酒は、こんな時でもなければ口に入りそうもありません。

続いて芸者のおりんとお袖、お蔦は呑む真似だけ。大方空っぽになった徳利は、杯を添えて鱸のお燗番のところに返されました。

「あ、お前は」

お爛番の卯八は飛付きました。が、その徳利を奪い取る前に、船頭の三吉は徳利の口を自分の口に当てて、少しばかり残って居た赤酒を、雫も残さず呑み干してしまつたのです。

「宜いってことよ、今日は大役があるんだ。酒でも呑まなきゃ、仕事が出来るものか」

「でも、その酒を呑んじゃいけないことがあつたんだ。仕様がねえなア」

「ケチケチ言いなさんなよ、酒の一本や二本、何んでえ」

船頭の三吉は、お爛番の卯八の文句に取合う様子もありません。それからの騒ぎが、どんなに悪魔的なものであつたか、たった一人素面だつた、若い芸者のお蔭だけがよく知って居ります。

一番先に狂態を演じたのは、江崎屋の清五郎でした。

「ウ、ハッハッハッ、ハッ、ハッ、ハッ、こりや可笑しい、ハッハッハッ、ハッ」

腹を抱えて笑い出すと、その洞ろな笑いが、水を渡り闇を縫つて、ケラケラケラと川面一パイに拡がって行きました。

それをきっかけのように、暫くのあいだ坐つたまま、顔の筋肉をムズムズ動かしていた巴屋の七平は、物に憑かれたように起き上がって、筋も節もなく踊り始めたのです。

続いて菊次郎——日頃賢そうに取澄ましているのが、膳を二三枚蹴飛ばすと、湧き上がるような怪奇な手振りで、ヒョロリ、ヒョロリと人の間を泳ぎ廻るのです。

年増芸者のおりんは、何やらわめき散らして、狭い船の中——杯盤の間を滅茶滅茶に転げ廻りました。日頃氣取つてばかりいる中年増のお袖も、訳のわからぬ事を歌い続けながら、あられもない双肌脱もろはだぬぎになつて、尻尾に火の付いた獣けもののように、船の中を飛び廻ります。

その中でも一番猛烈を極めたのは、船頭の三吉でした。口から泡を吹いて、酔眼すいがんをビードロのように据すえたまま、野猪のじしのように、臙ともから舳みよしへ、舳から臙へと、乱れ騒ぐ人間を掻きわけて飛び廻ります。

鎮まり返つた隅田川の夜氣を乱して、船の中には、一瞬氣違しゅんい染せんみた旋風ぶうが捲き起つたのです。洞ろな笑いと、訳の解らぬ絶叫と、滅茶滅茶にもつれ合う中を、六人の男女が狂態の限りを尽すのでした。(編注)

一番若くて、一番綺麗なお鳶つたは、颯風たいふうの眼のように移動する動乱うずの渦を避けて、お爛番かんばんの卯八の懷に飛込んだり、伽羅大尽きやらの貫兵衛うしろの背後に隠れたりしました。船はちょうど隅田川の真中に停つたまま、一寸も動く様子はありません。この動乱を避ける道は、夜の水より外にはないのですが、水心のないお鳶はさすがに其処へ飛込むほどの勇氣も無かつたのでしよう。

「旦那、どうしたんでしょう、私は、私は怖い」

日頃は醜みにくい蝦蟇がまかなんかのように思っていた貫兵衛も、今の場合では、たった一人の救いの神でした。ほとんど素面しらふで、臙ともからこの狂態をジッと見詰めている貫兵衛の冷たい顔には不氣味なうちにも、妙に自信らしいものがあつたのです。

「怖こわがることはないよ、あいつらは騒ぐことが好きなんだ、——



あんなにゲラゲラ笑いながら、滅茶滅茶に踊り狂いながら、地獄の底まで道中するんだ」

貫兵衛の醜い顔は、悪魔的な冷笑に歪ゆがんで、六人の狂態を指した手は、激情に顫ふるえます。

「助けてエー、旦那様」

お蔭は思わずすがり付いた袂たもとを離しました。冷静を装う貫兵衛の顔には、踊り狂う六人の顔よりも物凄いものがあつたのです。その騒ぎの中から、船頭の三吉はヒヨロヒヨロと艫ともに戻りました。

「退どいてくれ、——俺は、大変なことを忘れていた」

片手業にお爛番かんばんの卯八うをかき退けると、予かねて用意したらしい、木槌こづちを取って、船底の栓せんを横なぐりに叩くのです。

「あッ」

お爛番の卯八は後ろから、その身体を羽交締めにしました。ここで船底の栓などを抜かれたら、船の中の十人は、一とたまりもなく溺れ死ぬことでしよう。

「止してくれ、――邪魔しやがると、手前のガン首から先に抜くぞ」

いきり立つ三吉。

「頼むからそいつは止してくれ」

「何を言やがる」

振りもぎった三吉、もういちど槌は勢いよく振りあげられます。その争いは一瞬にして片付きました。船頭の三吉が予て仕掛けをしてあったらしく、船底の栓が他愛もなく抜けるのと、卯八の必死の力が、荒れ狂う三吉を舷から川の中へ押し転がすのと、殆んど一緒だったのです。

ドツと奔騰する水。

「あッ」

卯八は今抜き捨てた栓を捜しましたが、咄嗟の間に三吉が川の中へ抛り込んだものか、それは見当りません。自分の身体を持って行って、穴から奔注する水を防ぎましたが、そんな事では、なんの役にも立たないことが、すぐ解ってしまいました。

船の中の狂乱は、一瞬毎にその旋回度を増して、山水に空廻りする水車のような勢い。

「あッ、そうだ」

卯八は料理のために用意した出刃庖丁を取出すと、碇綱をブツリと切りました。あとは、艀に寄って、馴れないながら一と押し、二た押し。

水浸しみずびたになった涼み船は、それでも白鬚しらひげの方へ、少しずつ少しずつは動いて行きます。

時々ドツとあがる笑い声、それも次第に納まって、乱舞も大方風ないだ頃、船は向島の土手の下、三間ほどのところへズブズブと沈んでしまいました。

三

魂たましいの抜けたように、呆然ぼうぜんとしている貫兵衛うながを促し、か弱いながら、一番氣たしの確かなお蔭つたを手伝わせて、卯八一人の大働きで、水船から引上げた人間は五人、船頭の三吉と、野幫間のだいこの巴屋七平ともえやは、それつきり行方ゆくえ不知しれずになってしまいました。

近所の船頭をかり集め、松明たいまつを振り照して川筋を捜しましたが、その晩はとうとう解らず、翌る日の朝になって、船頭三吉と、野幫間七平の死骸は、百本杭ぐいから浅ましい姿で引上げられました。ところで、不思議なことに、呑む、打つ、買うの三道楽に身を持崩もちくずして、借金だらけな船頭三吉の死骸からは、腹巻の奥深く秘めた百両の小判が現れ、野幫間七平の死骸には、背後はいごから突き刺した凄まじい傷が見付かったのです。

「こんなわけだ、親分、行って見て下さい。前代未聞の騒ぎじゃありませんか」

ガラッ八の八五郎は、得意の早耳で、これだけの事を聞込んで来たのでした。

「そいつは御免蒙ごめんこうむろう、向島じゃ縄張り違えだ」

銭形平次は相変らず引込み思案です。

「縄張りの事を言や、三輪の万七親分だって縄張り違いでしょう」
「それが何うした」

「いきなり川を渡って、現場をさんさん荒し抜いた上、柳橋に渡って、お蔦を挙げ（つた）て行きましたぜ」

「それが見込み違いえだというのか」と平次。

「お蔦は芸者家業（かぎよう）こそしているが、親孝行で心掛の良い娘だ、人を殺すか、殺さねえか、親分」

「大層腹を立ててるようだが、誰かに頼まれて来たんじやあるまいな、八」

「へエ——」

「誰だか知らないが、門口（かどぐち）で赤いものがチラチラするようだ、ここへ通すが宜い、——お静」

「はい」

女房のお静は心得て門口へ行った様子ですが、何やら押問答（おしもんどう）の末、モジモジする娘を一人、手を取らぬばかりに伴（たづ）ねて来ました。

「お前さんは？」

平次も少し面喰（めんくら）いました。まだほんの十七八、身扮（みなり）は貧し気な木綿物ですが、この界限（かいわい）でも、あまり見かけた事のない良い娘（こ）です。

「ヘッヘッ、——お蔦の妹ですよ、親分」

ガラッ八は不意気に五本指で小鬢（こびん）などを搔（か）いて居ります。

「早くそう言や宜いのに、——なんと言いなさるんだ」

「お絹さんてんだ、親分、——あっしの叔母さんの知合で」

ガラッ八はまだモジモジして居ります。

「お絹さんと言うのかい、——一体どうしたというんだ。皆んな話して見るが宜い。俺の力で及ぶことなら、何とかして上げよう」
銭形平次が、こう言うのは、全くよくよくのことでした。それだけ、このお絹という小娘は、好感の持てる娘だったのです。

油っ気のない髪、白粉おしろいも紅も知らぬ皮膚ひふ、山のはいった赤い帯、木綿物の地味な単衣ひとえ、なに一つ取柄の無いようすですが、そのつくろわぬ身扮みなりにつつんだ、健康そうな肉体と、内気な純情とは、どんな人にでも、訴えずには措おかなかったでしょう。

「姉を助けて下さい、親分さん」

「一体、どうしたのだ」

「姉は——たいこもち幫間の七平を怨うらんでいました。あの人がお袖さんに頼まれて、余計な事を言い触らしたばかりに、菊次郎さんと切れてしまったんです」

「それで？」

「それで、七平を殺したのは、姉さんに違いない——って、三輪の親分が言います」

「フーム」

「それから、昨夜舟ゆうべの中で、みんな氣違ちがいみたいになったのに、姉だけ一人、平気でいたのが怪しあやしんですって」

「それだけの事なら、お前の姉さんを下手人げしゅにんにするわけにはゆくまい。外に何んか手掛りがあるだろう」

三輪の万七ろうかいの老獪ろうかいさが、それだけの証拠でお蔭を縛らせる筈はずもありません。

「姉ちゃんは怪我けがをしていたんです」

「——」

「手首を切って、ひどく血が出ていたんですって」

「そんな事もあるだろう、——よしよし、俺が行って覗いてやろう。親孝行で評判の良いお蔭が、人など殺せる道理はない、——八、一緒に行って見るか」

「へエ——」

親分を引張り出したのは、自分の手柄だけではなかったにしても、フェミニストの八五郎は、すっかり有頂天になって、親分の草履ぞうりなど揃そろえております。

四

「おや、銭形の」

向島で沈んだ船を見て、百本杭ぐいへ死骸を見に行った平次は、現場でハタと三輪の万七に逢ってしまいました。

「万七兄哥、もう下手人の目星が付いたようだな」

「今度は間違いがねえつもりだ。女の怨みうらは恐ろしいな、銭形の、

——磯屋いそやの貫兵衛は江戸一番の醜男ふおとこだが、あの弟分の菊次郎は、また苦み走った飛んだ良い男さ。お蔭はあの男に捨てられたのを七平のせいだと思ひ込んでいるんだ」

自分の手柄やにさがに脂下る万七に案内されて、ともかくも、引取手もなく、筵むしろを掛けたままにしてある二人の死骸を見ました。

船頭の三吉は、稼業柄のだいこにもなく、水に落ちて死んだというだけのことですが、野幫間のだいこの七平の死骸には、背中せなかから突いた傷が一つ、水に晒さらされて、凄まじい口を開いております。

「ヒ首あいくちや剃刀かみそりじゃねえ」

「出刃庖丁でばほうちようだよ、水船の中から拾って番所に預けてある」

万七は先に立ちました。

番所へ行って見ると、船頭三吉の腹巻から百両の小判と血脂ちあぶらの浮いた出刃庖丁と、それから、嚴重に縄を打ったままのお蔭が留め置かれております。

水船から這い上がって、半身ぐしよ濡れのまま縛られたのでしよう、腰から下は生湿りなましめのまま、折目も縫目ぬいめも崩れて、筵むしろの上にしよんぼり坐ったお蔭は、妙に平次の感傷をそそります。

妹のお絹によく似た細面ほそおもて、化粧崩れを直す由よしもありますが、生れながらの美しさは、どんな汚きたな作りをしても、蔽おおう由もなかったのでしょうか。うな垂れた緑の眉から、柔かい頬のあたりが霞かすんで、言いようもない痛々しい姿です。

「お前は左利きかい」
ひだりき

平次の最初の問いは唐突とうとつでした。

「いえ」

僅かに顔を挙げるお蔭。

「傷は右手首のようだが、——どうしてそんな怪我をしたんだ」

「自分の持った出刃庖丁で切ったのさ、解り切ったことじゃないか」

万七は苦々しく遮さへきります。

「右手に持った出刃庖丁で、右手首を切る筈はない」

平次のそう言う言葉に力を得たものか、

「お爛番かんばんの卯八うさんが、碇綱いかりづなを切って投げた庖丁が当たったんです」
お蔭は顔を挙げてはつきり言うのでした。

「本人はあんな事を言うがね」

と万七。

「だが、三輪の兄哥。若い女の手で、七平を殺した上、船頭の三吉まで水の中へは投げ込めないよ」

「何んの中毒か知らないが、船の中では皆んな半狂乱はんきやうらんだったそうだよ。目の昏くらんだ人間なら、女一人の手でも、二人や三人始末出来ないことはあるまい」

万七は頑がんとしてお蔭に疑いを釘付けにするのでした。

「お蔭——お前はいま大変な事になっているよ、——皆んな申上げてしまっちゃどうだ、隠し立てをして、万一の事があると、母親や妹が、飛んだ嘆きを見ることになるぜ」

「親分さん、私は、私は何んにも知りません」

平次の言葉の意味が解ると、お蔭はたださめざめと泣くのです。「船の中で正気だったのは、磯屋とお爛番かんぼんの外には、お前一人だったと言うじゃないか。お前は何にか知ってるに違いあるまい」

「——」

「お前の妹のお絹が、先刻俺の家へ来たよ。母親の嘆なげきを見て居られないから、何んとか、姉を助けてくれ——と言って」

「親分さん」

お蔭は縛しばられたまま、ガバと泣き伏しました。

「言うが宜い、お前は何にか知っているに違いない」

「——」

お蔭は黙って頭を振りました。

「ね、銭形の、この通りだ」

万七は我が意を得たる顔です。

五

「親分さん方、——磯屋いそやの爺じいやが、申上げたいことがあるそうですよ」

下っ引が一人、うさんそうに鼻を持って来ました。

「卯八うか、呼出すつもりだった。ちょうど宜い、ここへつれて来い」

「へエ——」

間もなく、下っ引に案内されて、恐る恐る膝小僧ひざこぞうを揃えたのは、昨夜のお爛番——磯屋の庭掃き卯八うでした。五十六七——一寸見は六十以上にも見えますが、長いあいだ戸外生活と労働で鍛きたえて、鉄のように頑丈なところがあります。

「何んだ、卯八」

万七は事件が厄介らしくなる予感で、少しばかり苦い顔を見せました。

「お蔭さんが縛られたと聞いて、びっくりして飛んで参りました。お蔭さんは、始終私か旦那の側に居りました。人を殺すなんて、飛んでもない」

「それじゃ、誰が七平や三吉を殺したんだ」

万七は乗出します。

「私ですよ、親分さん、——この卯八うですよ」

「何？」

「三吉を川へ抛り込んだのは、この私に違いございません」

「何んだと？」

「船に仕掛けを拵こしらえて、中流で沈めにかかったのは、あの三吉で

ございますよ。私は船底の栓せんを抜かせまいと思って一生懸命組打をしました。が、何んと言つても年のせいで、三吉を川へ抛り込んだ時は、もう栓が抜かれて、水が滝のように入っていました。仕方がないから、碇綱いかりづなを切つて、滅茶滅茶に岸へ漕こぎ寄せました」

卯八の言葉は予想外でした。が、これだけ筋が立っていると、もはや疑う余地ありません。

「三吉は何んだってそんな事をしたんだ」

平次もこの恐ろしい企くわだての意味は読みかねました。

「船の中の人間を皆殺しにするつもりだったかも知りません。碇綱で川の真ん中に止めた船が沈めば、あんなに酔つて居ちゃ、助かるのが不思議です」

「皆んな気違い染みた騒ぎをしていた——とお蔭つたも言うが、何んか変なものでも吞ませたんじゃないか」

「――」

「土手どてに這い上ると、ケロリとしていたが、船の中に居る時のことは、何んにも知らないと言うぞ」

万七は畳みかけました。

「――」

卯八は頑固がんこに口をつぐみます。

「それじゃ、七平を殺したのは誰だ」

と平次。

「それはわかりません」

「お前じゃないと言うのか」

「七平は舳みよしに居りました。私やお蔭かげさんは艫ともにおりました」

「出刃はお前が抛ほうつて、お蔭かげの手に当つたそうじゃないか。その

出刃で七平が殺されて居るんだぜ」

平次はその時の情景を想像している様子です。

「――」

「七平の側には誰と誰が居たんだ」

「おりんさんと、清五郎さんと、菊次郎さんと――」

「主人の貫兵衛は？」

「旦那様と、お袖さんは、私と七平さんの間に居りましたよ」

「フーム」

今度は平次が黙り込んでしまいました。

六

「八、昨夜船に乗っていた人間を、片っ端から調べ上げてくれ」

「へエ――」

「男も、女も、どんなつまらない事でも聞き漏らしちゃならねえ。

七平と懇意こんいなのや、七平に怨みや恩のあるのは、とりわけ大事だよ」

「そんな事ならわけはねえ」

「急ぐんだよ、八」

「へエ」

「それから磯屋の貫兵衛も、身上しんしょうから女出入りまで、根こそぎ調べて来い、こいつは一番大事だ」

「心得た」

「一人で手に負おえなかったら、下っ引を二三人狩り出せ。明日の朝までだよ、八」

平次の言葉を半分聞いて、八五郎は飛出しました。
それから半日。

「親分」

八五郎はもう帰って来たのです。

「どうした、八」

「いろいろの事が判りましたよ」

「話してみな」

「お蔭つたが七平の細工さいくで、菊次郎と割かれたことは――」

「それはもう判っている」

「菊次郎は飛んだ野郎で、金と女を取込むことにかけては大変な名人ですよ」

「――」

「お蔭と手を切って、近頃はお袖に夢中になっていますよ」

「フーム」

「兄貴の磯屋の身代を、どれだけくすねたか解りやしません。近頃磯屋の身上が歪ゆがんで、伽羅大尽きやらの貫兵衛は首も廻らないのに、菊次郎だけは、大ホクホクだ」

「磯屋がそんなに悪いのか」

「この盆ぼんは越せまいという話ですよ。何しろ十年越の駄々羅遊だだらびだ。どんなに身上があつたってたまったものじゃない。それに、義弟の菊次郎を始め、巴屋七平ともえや、江崎屋清五郎などは、滅茶滅茶に煽おだてて費つかわせて、そのかすりを取ることはかり考えているんだ」

「清五郎と七平の暮し向はどうだ」

「野幫間のだいこを家業のようにして居るくせに近頃は大変な景気だ。ことに清五郎なんか、地所を買ったり、家を建てたり、おりんの身

請けをするという話もありますよ」

「よしよし、それで大分判ったようだ。ところで、八。横山町の町役人に会って、明日の辰刻前、磯屋の主人貫兵衛が、御手当になる筈だ、万事抜かりのないように仕度をしておけ——とこう言っておいてくれ」

「それは、本当ですか、親分」

「本当とも、笹野の旦那には、あとでそう言って置く、——こいつは大変な捕物だ。抜かっちゃならねえ」

「あんまり早く町役人に言っておくと、磯屋の耳に入りますよ」
「それで宜いんだよ」

「へエ——」

「おッと待った、八」

「——」

「今晚、少し仕事がある。横山町の自身番へ潜り込んで、俺の行くのを待ってくれ」

「へエ——」

八五郎は何が何やら解らずに飛んで行きます。

それから二た刻ばかり、江戸の街々もすっかり寝鎮まった頃、平次は横山町の自身番を覗きました。

「八」

「あッ、親分」

「静かについて来い」

二人はそれっきり黙りこくって、城郭のような磯屋の裏口へ忍び寄りました。

「何をやらかすんで、親分」

「ちよいと、泥棒の真似をするんだ」

「へエ――」

「どんな事が始まって、驚くなよ、八」

「――」

平次の調子の物々しさに、八五郎もツイ胴^{どう}ぶるいが出るのでした。

「この堀^{へい}へ飛付けるだろう」

「大丈夫ですか、親分は」

「大丈夫だとも」

二人は裏口の側^{てんすいおけ}の天水桶^{ふみだい}を踏台^{ふみだい}にして、あまり苦勞もせず
に堀を乗り越えました。

「どうするんで、親分」

「シッ」

「驚いたなア」

「驚くのはこれからだよ」

磯屋の裏をグルリと一と廻り、平次は家の中へ忍び込めそうな場所^{さが}を探^{さが}す様子でしたが、伽羅大尽と言われた構えだけに、さすがに忍び込む場所ありません。

「親分、あれは？」

「シッ」

平次は八五郎を突飛ばすように、あわてて物蔭^{ものかげ}に身を潜^{ひそ}めました。裏口が静かに開いて、真っ黒なものが、そろりと外へ出たのです。

「――」

二人は呼吸^{いき}を殺して見詰めました。

真っ黒な人間は、しばらく外の様子を見ている様子でしたが、誰も見とがめる者がないと判ると、引つ返して家の中から手燭てしよくを持って来ました。

磯屋いそやの主人、伽羅大尽きやらの貫兵衛です。

貫兵衛は平次と八五郎には気が付かなかったものか、その前を通り抜けて、物置の方へ足音を忍ばせます。

「来い」

平次は八五郎を小手招こてまねぎながら、静かにその後をつけました。

やがて物置から、プーンとキナ臭い匂い、パチパチと物のはぜる音。

「八、大変だ。あの火を消せ」

「応おッ」

二人が一团になって飛込むと、磯屋貫兵衛は、手燭の火を、物置の中のガラクタに移している最中だったのです。

「野郎やろうッ」

遮しや二無二飛む込むガラッ八。

「あッ」

燃え草の火の中に、貫兵衛と組んだまま転がり込みました。咄とつ嗟さの間に平次は、物置の側にある井戸に飛突くと、幸いそこにあつた用心水を一杯、燃え上がったばかりの焰ほのおの上へ遠慮会釈もなく、ドツと浴びせたのです。

「わッ、ブルブル」

火は消えました。が、ガラッ八と貫兵衛は、取っ組んだままズブ濡れになって、物置の口へ転がり出ます。

「何んという馬鹿なことをするんだ。御府内ごふないの火付けは、火焙ひあぶり

だぞ」

平次はそれを闇の中に迎えて叱咤しったします。

「相済みません」

相手の素姓すじょうも判りませんが、貫兵衛は威圧いあつされて、思わず大地に崩くずれました。

「幸い誰も気が付かない様子だ、——酒へ毒を入れたり、物置へ火をつけたり、一体これはどうした事だ」

「——」

「俺は神田の平次だ、話して見ちゃどうだ」

平次の声は威圧あいいんから哀憐あいれんに変わっておりました。

「銭形の親分——良い方に見付かりました。皆んな申上げます。

この私が、今晚死ななければならぬわけ——」

七

物置の前から奥の一と間に案内されて、平次とガラッ八は、磯屋貫兵衛の不思議な懺悔さんげばなし話に耳を傾けました。

「聴いて下さい、親分。この世の中に、私ほど幸しあわせに生れて、私ほど不幸せになった者があるでしょうか」

磯屋貫兵衛の話はこうでした。貫兵衛が父の跡を継いだのは十年前、ちょうど二十五の歳、金持のお坊っちゃんに育って、阿諛あゆと諂てんねい佞ねいに取巻かれ、人を見下みくだしてばかり来た貫兵衛は、自分の世帯になって、世の中に正面から打つかった時、初めて、自分の才能ようぼう、容貌みりよく、魅力——等に対する、恐ろしい幻滅を感じさせられたのです。

それまで、自分ほど賢い者は、江戸中にもあるまいと思ったのが、我儘な坊っちゃんの言い募る言葉に屈従する人達の姿であり、自分ほど立派な男はあるまいと信じさせたのは、おべっかを忠義と心得た、卑怯な人達のお世辞を、鏡と没交渉に信じていたに過ぎないことを、つくづくと思い当らせられる時が来たのでした。

貫兵衛は、恐ろしい失望と自棄に、氣違ひ染みた心持になりましたが、間もなく、何万両という大身代が自分の自由になったことと、その何万両を散じさえすれば、お坊っちゃん時代の夢を、苦もなく再現することの出来ることに、氣が付いたのです。

あらゆるお世辞、——齒の浮くような阿諛を、法外な金で買つて、貫兵衛は溜飲を下げました。色街の女達も、百人が九十人まで、小判をバラ撒きさえすれば、助六のように自分を大事にしてくれます。

行くところ、煙管の雨は降りました。家へ帰ると、女達の手紙を、使い屋が何十本となく持ってきてくれました。やがて、金の力の宏大なのに陶醉して、貫兵衛はもう一度、それが自分に備わった才能、徳望のように思い込んでしまったのです。

それから十年の間、貫兵衛はあらゆる狂態をし尽しました。女房を迎える暇もないような、忙しい遊蕩——そんな出鱈目な遊びの揚句は、世間並みな最後の幕へ押し流されて来たのです。

手っ取り早く言えば、磯屋にはもう一両の金も無くなって居たのです。家も、屋敷も、商品も、二重にも三重にも抵当に入つて、この盆には、素裸で抛り出されるか、首でも縊るより外に、貫兵衛の行く場所はなかったのです。

「そうになると、女共は皆んな私から離れてしまいました。お蔭も、

おりんも、お紋も、お袖も——、それから私を十年越し喰い物にしていた遊び仲間も、蔭へ廻って私の悪口を言うようになりました。何千両となく取込んだ義弟の菊次郎も、巴屋の七平も、江崎屋の清五郎も、私の顔を見て、近頃はもう昔のようにお世辞笑いをしなくなつたばかりでなく、わざと私に聞えるように、私の悪口をさえ言うようになったのです」

貫兵衛の話の馬鹿馬鹿しさ、ガラッ八の八五郎さえ、我慢がなり兼ねて時々膝を叩きますが、銭形平次は世にも神妙に構えて、

「それから」

静かに次を促します。

「私は一期の思い出に皆んなを馬鹿にしてやろうと思いました。昔金に飽かして手に入れた、笑い茸の粉を、和蘭渡りの赤酒に入れて、皆んなに一杯ずつ吞ませ、あらん限りの馬鹿な顔をさせて見るつもりだったので」

話は次第にその晩の筋になって来ます。

「涼み船を出して、首尾よく笑い茸の酒を吞ませ、皆んなの、あらゆる馬鹿な姿を眺めました。それがせめてもの——翌る日は死んで行く私の腹癒せだったのです。その晩帰ると、奉公人に皆んな暇を出し、この家に火をつけて、私は首でも縊るつもりでした。

——それが、船を沈められたり、七平が殺されたり、あんな思いも寄らぬ騒ぎになってしまったのです。私の死ぬのは、そのお蔭で一晚遅れました——尤も」

「——」

「尤も、卯八だけは私の心持をよく知って居りました。あればかりは、私におべっかも使わず、お世辞らしい事も言いませんが、

こんな落目になっても、一生懸命、私を庇^{かば}ってくれました。——笑
い茸の企^{たくら}みなども、最初はたつて止めました。が、命に別条のない
ことだからと説きふせられて、私に一世一代の溜飲^{りゅういん}を下げさせた
のです」

「船を沈めさせたのは誰の指図だ」

平次はそれを知りたかったのです。

「それは知りません。——私は自分の命さえ捨てるつもりでした。
今さら嘘^{うそ}も偽^{いつわ}りもありません。船頭の三吉に、船を沈めることを
言い付けたのだけは、この私じゃない」

「すると?」

「第一、私にはもう、百両という小判がありませんよ」

貫兵衛はそう言って淋しく笑うのです。三吉の死体の腹巻に
あった金の事でしょう。

八

「親分、驚いたね」

ガラッ八は、黙々として横山町から帰る平次に声を掛けました。
磯屋貫兵衛を町役人に預けて、さてこれから何うしようもなく、
家路を辿^{たど}っていたのです。

「俺も驚いたよ。七平を殺したのは、お蔭や貫兵衛でない事は確^{たし}
かだ」

「三吉に言い付けて、船を沈めさせた奴じゃありませんか」

「えらいッ、八、其処へ何んだって気が付かなかったんだ。あの晩、
赤酒を呑む振りをして呑まなかった奴と、泳ぎ^{およ}のうまい奴を調べ

て来い、——こんどは間違いないぞ」

「そんな事ならわけはありませんや」

「何処へ行って聞くつもりだ」

「船宿を軒並叩き起して——」

「それも宜いが、卯八とお蔦に聞くのが早いぜ」

「心得た」

ガラッ八は闇の中に飛びます。翌る朝ガラッ八が、その報告を持って来たのは、まだ薄暗いうちでした。

「親分、驚いたの何んの」

「どうした、八」

「あの中で泳げないのは、貫兵衛と爺やの卯八だけですよ」

「何？」

「死んだ七平なんぞと来た日にや、河童かつば見たいなもので」

「菊次郎と清五郎は？」

「二人ともよく泳ぐそうですよ、——尤も女どもは皆んな徳利だ、もつと

少しでも泳げそうなのは、橋場はしばで育ったお袖くらいのもので」

「すると——面白いことになるぜ。七平は船が沈んでも死に相もそう

ないから刺さされたというわけだろう」

「其処ですよ、親分」

ガラッ八は大きな声を出します。

「ところで、赤酒を呑まないのは、誰と誰だ」

「そいつが大笑いで、親分」

ガラッ八はクスリクスリと笑います。

「何が可笑おかしい」

「あの伽羅大尽きやらだいじんの貧乏大尽がどこまでお目出度たいか解らない」

「どうしたんだ」

「赤酒の中に、何んか仕掛けがあると知って、たった一人も呑んだ奴がないと聞いたらどうします」

「本当か、それは、八？」

この情報には、さすがの平次も驚きました。

「どうかしたら、殺された七平くらいは呑んだかも知れないが、菊次郎も清五郎も、おりんも、お袖も呑んじゃ居ません。皆んな川に捨てたり、手拭てぬぐいにしめしたりしたそうで——これは最初から素面しらふだったお蔭と卯八が見届けていますが。尤も三吉は確たしかに呑んだそうで」

「成程な」

「笑い茸わらだけなんて、そんなものを吞ませて、万一間違いがあつてはと、人の良い卯八がそつと菊次郎に耳打をしたんです」

「そいつは大笑いだ、——吞まない毒酒を呑んだ振りをして、六人揃そろって気違い踊りと馬鹿笑いをするとはふざけたものだな、伽羅大尽らだいじんの馬鹿納めには、なる程そいつは良い狂言きやうげんだ」

「ところで下手人げしゅにんは誰でしょう、親分」

「解とって居るじゃないか」

「へエ？」

「皆んなだよ」

平次は八五郎と一緒に、まず磯屋の近所に住んでいる菊次郎を襲おそいました。猛烈に暴れるのを縛って、つづいて江崎屋の清五郎を、それから——年増芸者のおりんとお袖とを、四人数珠じゅず繋ぎにして、その朝のうちに送ってしまったのです。

×

×

「さア判らねえ、下手人は四人ですかい、親分」

「その通りだよ。菊次郎が頭領かしらになって、この十年の間に、磯屋の身代を減茶減茶にし、その半分位は自分達が取込んでいたんだ」
「そいつは世間でも知っていますよ」

「いよいよ磯屋が身代限りということになると、お白洲しらすへ出るから、自分達の悪事がみんな知れる、——涼み船で笑い茸を吞ませるといふ話を卯八から聴いて、菊次郎と清五郎は、その裏を掻く相談をしたんだ。船頭の三吉に百両の大金をやって、河の真ん中で船を沈めさせ、貫兵衛とお蔦と卯八を、溺おぼれさせ、自分たちだけ助かるつもりだったのが、その場になって七平が不承知を言い出して、仲間割れが出来て一寸困ったところへ、船頭の三吉は本当に毒酒を呑んで、卯八のような年寄に川へ抛ほうり込まれた」

「へエ——」

「卯八の抛った出刃庖丁でばぼうちようを拾ったのは、一番近いところにいたお袖そでだ。お袖の手から菊次郎が受取り、これを清五郎に渡した。清五郎がそいつで舳みよしに後ろ向になっている七平を突き、川の中へ落したんだろう。ただ川の中へ突落した位じゃ、泳およぎのうまい七平は死なない——七平に寝返りを打たれちゃ菊次郎も清五郎も首が危ない」

「なアる——」

「そんな事をしているうちに船は岸に着いた。人立ちがして来たから、その上の細工は出来なかったのだろう」

そう説明されて見ると疑う余地ありません。四人——七平を加えて五人でやった細工さいくなら、なるほど手際よく運びもするでしょうが、最後の際きわに、七平の裏切と卯八の忠義で、悪者どもの

企^{たくら}みが喰い違ってしまったのです。

「悪い奴らじゃありませんか。親分」

「人間の屑^{くず}だよ、——俺の立てた筋^{すじ}はまず間違いはあるまいと思う。このお調べは面白いぜ、八」

「へエ——」

「気の毒なのは磯屋の貫兵衛だ、——が、自業自得^{じごうじとく}というもののさ、

——それよりも可哀想なのはお蔭^{つた}だ」

平次はつくづくそう言うのでした。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

底本では男女の数を「七人」としていますが、文意および嶋中文庫版「銭形平次捕物控」の表記にしたがって「六人」に改めました。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール讀物」昭和十四年八月号 文藝春秋社

底本―「銭形平次捕物全集」第五卷 河出書房 昭和三十一年七月十五日初版

編集・発行 銭形倶楽部



銭形倶楽部

<http://www.zenigata.club/>